

## 温故創新



長尾 徳博\*

近年、世界的に自然災害が多発し、ひとたびそれが発生すると多くの人命が損なわれるような激甚化する傾向がみられます。わが国においてもその傾向はここ数年の例で顕著であり、2011年の東日本大震災による津波被害をはじめ、記憶に新しいところでは、昨年8月に広島市で発生した豪雨による土砂災害、同じく9月には、多数の死傷者を出す大惨事となった御嶽山の火山噴火があり、自然災害も多様化しています。このような災害の傾向は、温暖化などの世界的な気候変動の進行が影響しているとの学術的見解もあります。しかし、多くの災害が幾度となく繰り返されてきたものであり、自然の営みという果てしなく長い時間軸で考える場合、これまでと同様に自然との共生が現代にも課せられたと捉えるべきであり、過去を踏まえた現代人の防災・減災に対する英知が試されることはないでしょうか。

さて、PC業界を含む建設業界の市場は、2020年の東京オリンピック開催決定やリニア新幹線の建設着工、そしてはや猶予なしの震災復興など、新たな国土造りに向けた需要の増大で、久しぶりに明るい材料が見えているところです。一方でこのチャンスにどのように向き合って真に価値ある市場としていくかが試されるということです。最近のPC業界を取り巻く環境にはさまざまな課題があります。技術者・技能労働者などいわゆる担い手の不足、労働者の高齢化による生産性の低下や労災事故の増加、そして建設業者の財務状況や福祉関連の制度整備を含む待遇改善問題など、近代市場に対応できる産業として解決しなければならない問題が数多くあります。さらに、インフラの老朽化による事故や、安全性が確保できないことによる通行止め区間が存在するなど、ハード面での問題も少なくありません。

このようななか、東名神高速、首都高速、阪神高速、そして東海道新幹線など、日本の物流ネットワークの基幹を担い、経済成長を支えた立役者たちがそろって建設後50年を迎えました。人にたとえた場合、50歳はまだ働き盛りであり、多少の不具合はあっても、抜本的な手当を必要とするようなことは多くはありま

せん。しかし、これら時代の立役者たちは過酷、過剰な働きがあったのか、大規模な改築を必要とする状態になっています。とくに直接的に自動車の荷重を支える床版の劣化・損傷が顕著です。供用中の重交通や融雪剤の散布による塩害などに起因するもの、一部には建設当時の施工技術の未熟さや長期耐久性に対する意識の低さから初期不良を生じたものなどがあります。これら代表的なネットワークのうち、高速道路各社（NEXCO三社）では、全国的な高速道路網を、その機能を停止あるいは大幅な低下をすることなく、15年単位の時間をかけて改修を行う計画を発表しました。このような重要インフラの大手術は、現代社会におけるインフラ整備という時間軸の中ではじめて経験することであり、做う過去も少なく十分な臨床データももち得ません。したがって、このテーマを克服するためには、生産現場を支える技術や仕組みなど、さまざまな視点からの工夫によりこれまでとは異なる新しい事業実施の枠組みを整備する必要があります。

本格的なメンテナンス時代を迎え、今後のわが国の50年を支える進化したインフラの整備を行ううえで、改めて現代市場にマッチしたソフト、ハード両面での合理性を兼ね備えた事業・生産システムを構築することが求められます。景気の波に呼応するかたちで、経済的合理性の観点から技術者や労働者の数を増減してきた過去がありますが、二度と貴重な人材を容易に手放すようなことがあってはならない。私たちが手掛けようとする構築物の品質においても、過去の50年と同様の経緯を辿ることは許されません。それには、過去に学び、あるいは過去に倣っていつそう進化した、未来形の産業を創造していくこと、すなわち「温故創新」が必要といえます。

まだまだ脆弱な国土を、国民が安心して暮らしそして財産を蓄えることのできる強靱なかたちに生まれ変わらせるために、私たち建設業に携わる者たちに課せられる使命は大きいといえます。「継承」によって学ぶ知恵によって、いつそうの技術イノベーションを期待したいものです。

\* Norihiro NAGAO：(一社)プレストレスト・コンクリート建設業協会 副会長（施工安全委員長）  
 (株)富士ビー・エス 代表取締役 会長